No.31

古高取通信

令和 2年 1月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

1. 活動の拠点を創る
2. 古高取の知識を深める
3. 古高取の魅力を伝える
4. 次世代へつなげる

古高取を伝える会会報

目　次

古高取の魅力を伝える　・・2
活動の記録　・・・・・・・2
窯元紹介　・・・・・・・6
なんでも掲示板　・・・・・・6

グレタ・トゥンベリさんに学ぶ

温暖化対策の即時実行を訴え「私たちは絶滅に差し掛かっているのに、あなたたちが話すのは金のことと、永遠の経済成長というおとぎ話だけ」「私たちを失望させる選択をすれば、決して許さない」と訴えたグレタさんの言葉は多くの大人たちに衝撃を与えた。永遠の経済成長というのはありえない、「経済成長の先に待っているのは戦争」という歴史の教訓に私たちは学ぶべきだ。

思えばわたしたちの世代は、所得倍増、高度成長のフレーズに頼って、盲目的に走ってきたような気がする。

スマホもパソコンもなかった車も少なく、貧しかったけど、路地は子供たちの遊び場だった。道は車に占領され、スマホ漬け、そして、都合の悪い資料は隠す、その場逃れの発言、膨らむ借金を顧みない国の指導者たちの姿勢には、子供たちの未来はどう映っているのか。

身近な小さな町の指導者たちも、心の豊かさを求める住民の要求には、金がないという理由で先送りする。

「人材の育たないまちに未来は在るだろうか。」

隅田　知明

古高取の魅力を伝える

京都から直方に移り住んで…

直鞍ビジネス支援センター
センター長　岡田 高幸

「また社長になってください」先日、かつての取引先と食事していた際に言われた言葉です。

私は江戸時代から続く京都の茶わん屋の十四代目でした。百貨店やアウトレットに出店するくらい大きな会社だったものの、１９９０年頃から業績の悪化が続き、２０１５年に新たなオーナーに事業をお渡ししました。

現在は直方市を中心に直鞍地域の中小企業、創業を志す方の売り上げアップのための相談業務をおこなっています。ありがたいことに開設から三年近くになりますが、相談件数は当初の一日一、二件から四件前後に増え、支援事例が経済産業省のコンテストで表彰されるなど成果も積み上がってきています。

打ち合わせ中の岡田氏

直方に引っ越してきてまもなく、末松さんに内ヶ磯窯の跡などを丁寧に案内していただきました。私は全国各地のメーカー様からお預かりした商品を売っていたばかりで作陶の知見はありません。しかし、直方に根付く古の先進技術の名残を目の当たりにすると、家業との縁を感じずにはいられませんでした。

二年間の単身赴任の後に家族を直方に呼び寄せ、子どもは直方の小学生となりました。ある日、ふと読んでいた市報に陶芸教室の告知があり、子どもを参加させることにしました。抽選に外れたらどうしようとドキドキしていたものの無事受講できることになり、当日は教室まで送り届け、あとは末松さんなど皆様にお預けしました。帰ってきて感想を尋ねると「楽しかった」の一言。作品の出来上がりを気にしているようなので、言葉通り充実した時間を過ごさせてもらい、ひさびさに土に触れることができたのだろうとほっとしました。九月に焼き上がった作品は宝物の一つになったようです。

ホップ・ステップ・キャンプ（陶芸教室）の様子

前職ではまったく縁のなかった直方での生活も四年目を迎えようとしています。地域の人々の伝統を大切にする感覚は京都の雰囲気とそっくりだと感じる日々です。また、かつての京都の茶わん屋十四代目が、４００年の歴史を持つ高取焼の黄金期を生み出した直方にいるというのも不思議なものだと感じています。

さて冒頭の会話の続きです。私は「直方で必要とされる限りは今の仕事を続けますので、前の会社に戻ることはありません」とお答えしました。もう茶わん屋を離れた私ですが、これからも高取焼の歴史に触れ、直方での生活を充実したものにしていきたいと思います。

活動の記録

●子供焼物教室（焼物部会）

〈令和元年八月～十月〉
場所：直方市内の小学校

本年度の市内小学六年生対象焼物教室は、すべて終了致しました。

「第九回」
〈令和元年九月二十五日（水）〉
場所：新入小学校

「第十回」
〈令和元年十月八日（火）〉
場所：直方東小学校

「第十一回」
〈令和元年十月十一日（金）〉
場所：下境小学校

後期の実施は、三校でした。ご協力くださいました皆様、本当にありがとうございました。

●大茶会に向け「マイ茶碗」づくり

（地域対象焼物教室）

〈令和元年十一月十九日（火）～二十三日（日）〉

場所：直方市中央公民館 工作室

昨年に引き続き、今年も4月26日（日）に「ちくぜんのおがた高取焼大茶会」が催されます。大茶会では、いろいろな流派の方がお茶を点ててくださっています。その大茶会で自分で作ったマイ茶碗でお茶を飲みましょうとお誘いをしています。

既に11月19日（火）～23日（土）に第一回の茶碗づくりを行いました。19名の参加がありました。直方市のホームページで見かけたと市外からの参加もありました。小学生の参加もありました。（直方市の小学校では六年生になると古高取焼の歴史を勉強し、マイ茶碗を作ります。）

皆さん、自分好みの茶碗を作られていましたので、当日はきっと格別な味がするのではないでしょうか。

ちょうど今、NHKの連続朝ドラでは、信楽焼の女性陶芸家が主人公のスカーレットが放送されています。陶芸に関心を持たれる方も増えることでしょう。

寒い時期の茶碗づくりとなりますが、大茶会は4月です。気候のよいその時にマイ茶碗でお茶を楽しんでいただきたいと思います。

第二回「マイ茶碗」づくりを2月（第二・第四の土・日）に行います。

倉田豊子

記

日時　2月8日（土）・9日（日）
・22日（土）・23日（日）
10時～12時

場所　直方市中央公民館 工作室

粘土及び焼成費　2000円

●高取焼基礎研修講座（学習部会）

〈令和元年八月～十一月〉

場所：えみくる・中央公民館

本年度の高取焼基礎研修講座（全四回）は、十一月のまとめ講演まで終了致しました。

最後に、現地視察のバスツアー（左記）を実施予定です。

皆様、どうぞご参加ください。

副島邦弘

記

とき　3月25日（水）

場所　佐賀県有田町地区（九州陶磁資料館・今右衛門窯・他）

問合せ・申込（末松）

080-5602-5450

井上泰秋氏をお迎えして

理事　副島邦弘

本年度の古高取基礎研修講座のまとめとして特別講義をお願いしましたのは、井上泰秋氏で、十一月三十日（土）十三時三十分～十五時三十分まで直方市中央公民館三階　和学習室で実施した。

講師は、熊本県国際民藝館館長で小代焼ふもと窯主の井上泰秋氏をお招きして、演題は『小代焼と高取焼について』の講義をお願いした。この事業は、令和元年度地域づくり団体活動助成事業でもあった。

先生の講義は、パワーポイントを使いながら小代焼中心に映像でまとめられた。当日資料として「作り手から見た小代焼の特長と魅力」と陶歴を三枚配布された。参加者四十名。

その内容は、三点に絞ってスライドを使って話された。

（1）小代焼の現状と歴史
（2）小代焼の技術の特長
（3）小代焼発祥の窯古畑窯と井上新九郎の関係

話されたことを項目毎にまとめてみると

（1）小代焼の現状と歴史

熊本県の窯元（陶器・磁器）は、昭和三十二年六軒（伝統工芸の八代焼を含む）が現在では百五十軒にのぼっている。その中で小代焼を名残っているのは十二軒の窯元である（小代焼窯元の会）。

現在どこでもカマがもてて、そして作品が作れる。これには便利なカマが出来ているからです。電気ガマ・石油ガマ・ガスガマ等で、薪ガマである登り窯は珍しいものになっている。機械によって火をコントロールするため素人でも焼けるわけで、焼成温度がオートに

なっておりますので、これがブームとなっており出来上がった作品が公募展を飾っているわけです。素人から玄人まで幅広い人材から選ばれるから陶芸技術も広がっている。

小代焼の近世古窯跡は現在荒尾市・南関町の小岱(注1)山の山歴に主要な古窯跡が存在する。

1. 瀬上窯跡（近世後期）
荒尾市宮尾
2. 瓶焼窯跡（近世前・中期）
荒尾市宮尾
3. 野田窯跡（近世後期）
南関町堀池園
4. 古畑窯跡（慶長年間）
荒尾市府本

の四ヶ所が上げられている。その技術と特長を説明すると

（2）小代焼の技術の特長

小代焼の特長と魅力を端的に言うと、小代粘土を主原料に、釉薬は木灰・藁灰などの灰を用い、１２５０～１３００度の高温で焼き上げたものである。天然の灰釉が織りなす流しの変化・窯変の妙で、底知れぬ美しさとその魅力を醸し出している。

これが一番の特長は、原料の陶土で、可逆性に優れた粘土層は、小岱山の西側にしかなく、明治時代まで焼き続けられた瀬上窯・瓶焼窯は現在、荒尾市府本地区や平山地区から陶土を運んでいます。しかし昭和初期まで焼かれた南関の野田窯は、堀池園の周辺から採土している。陶土は採土する場所によって鉄分の多い所、少ない所、粘り気の強い所、少ない所、耐火度のある粘土、そうでない、など多種多様な粘土層があるわけで、その粘土層なことから、古代から樺丈の一大窯業地帯として形成されていた。須恵器の窯跡群の発見によって理解される。この事実は後の加藤清正も承知していたようで、朝鮮から連れてきた陶工も、この地で陶器を焼いた。この焼物を古小代と位置付けられて、その中の一人に井土新九郎もいたわけで、その窯場は古畑窯である。成形の方法は、九州各地の伝統窯同様、ケロクロが使われています。作る回転方向は、右、左、それぞれあるようで、形成方法として、一個一個作る「玉づくり」、小物など作る時は「引き作り」、他に紐作りしてあとロクロで挽き伸ばす作り方、紐作りして当て木と叩き板を使う叩き作りなどがある。ロクロを使わず、手づくね、木型や素焼の型を使っての型づくり、平に伸ばしたタタラ作りなどがあり、近年では、ケロクロの代わり電動ロクロが普及しているし、型は石

ワラ白打掛け流し深鉢　　井上泰秋氏

膏型が使われている。形成時に施す装飾として、輪花文、櫛目は柔らかい内、半乾きの仕上げの段階で、鎬、面取り、飛鉋、貼り文、刷毛目、透し彫り、象嵌などを施している。

特長の釉薬は灰釉が使われている。地釉に使う灰釉は、木灰（土灰）をベースに、長石、藁灰、それに鬼板（鉄分）や紅柄を適量に加えて造る。発色によって青小代、黄小代、飴小代と呼ばれる釉調は、素焼をした器に掛ける釉薬の厚味、素地に含まれる鉄分の度合い、焼く炎の性質（還元から酸化）で色合いは変わる。白小代や流しの白釉は藁(注2)灰をベースに造られる。（これらのことを映像を使い一点一点について話された。）

一番おもしろい窯変が出るのは、薪を使って焼く窯が最適と、古い製品を手にしたときに改めて強く感じる。登り窯の火を見つめ、焼かれた製品を手にしたときに、昔の職人の息吹が蘇ってくる。これが陶工の魂であると考えられる。

（3）小代焼発祥の窯と井土新九郎との関係

小代焼は、筑後の八女立花町北ノ山の男ノ子焼であると講師の井上氏は強調されていた。しかし、

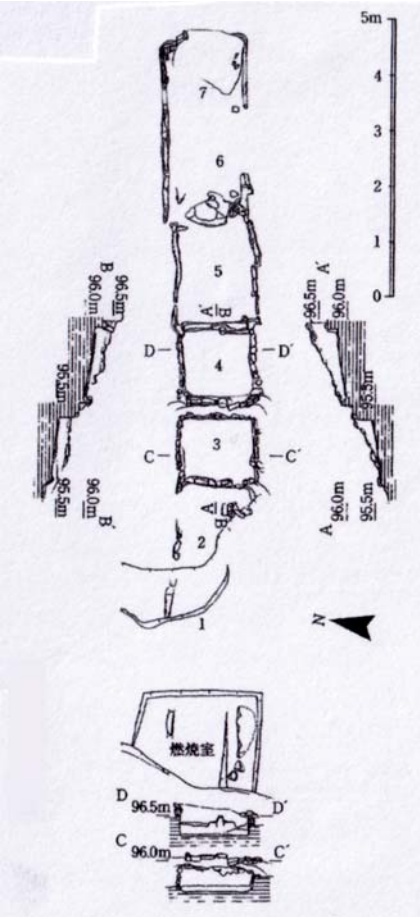
豊前の上野焼の陶工である高鶴元氏は、岩屋高麗窯付近の小字名に葛城・小路・後小路があり、この字名が葛城氏と牝小路の氏名となっていると推定されている。

小代焼の瓶窯は、現在残っている窯の下に、江戸前期の古瓶窯跡[注3]が寛永年間頃の築窯であるものを破壊して、現在に残っている窯が造られたのであって、ここで葛城・牝小路両氏が職人として働いていた。瀬上窯も江戸後期に同地の御山支配役瀬上林右衛門が築いもので、葛城・牝小路氏が職人として窯本体を維持管理して修復補修することによって明治中頃まで継続された。

男ノ子焼の陶工達は柳川藩三代の藩主立花鑑虎（在職１６６４～９６）の代に熊本県小代山山麓へ移り、男ノ子焼は閉窯した。この窯では褐釉や黄釉を薄く掛けた葉茶壺・甕などが焼造したと伝承されている。

小代焼の発祥の窯は、荒尾市の府本の古畑窯で講師が発見されたもので、この窯の発掘調査については、平成十二、十三年に『荒尾市史』の編纂にあたり、試掘調査が実施された。

その結果、古畑窯は全八室で階段状連房の登り窯で、窯本体の平面形は縦長で、複元長は十五メートル前後に納まり、ごく小規模であった。日用雑器を中心に焼いたもので、主に甕・壺・瓶等を焼いていた。釉薬は灰釉が中心で、藁灰釉は少ない。窯詰にはトチンを使用し、また製品はベタ置きであったと思われる。窯の構造や遺物には古唐津の影響が見られる。年代的には１６１０年前後と推測できる。しかしながら試掘であったため、発掘面積が少なく、出土遺物も少なさから操業期間は短く、十年前後であろうことが考慮される。この窯は加藤氏時代の窯で、この地の城代であった加藤正方が清正の死後、幕府の命令によって八代麦島城代になった時に、古畑窯の陶工達が１６１２年以後に八代高田の奈良木木下谷に移動したものと考えられ、奈良木で焼かれた”やきもの“が肥後焼と称され、茶会記に出てくる肥後焼である。加藤家の御用陶工は弥太夫一門で、その中に井土新九郎も職人として働いていた。この新九郎が筑前国鞍手郡永満寺の宅間窯に移動したのは、高取八山の岳父であったため、黒田氏と加藤氏の了解の上で移っていった。これも小代焼の謎の一つである。



古畑窯跡実測図

荒尾市府本字古畑・古畑窯跡
（平成12～13年、予備的発掘調査。
「荒尾の文化遺産」2003年より）

古畑窯跡出土遺物

これらのことを映像を通して話された。

スライドの中で、特に平成二十七年の秋篠宮ご夫妻のふもと窯にお成りを賜ったのは、熊本地震の前年であったことも幸いした。講師には平成十二年に宮内庁から、小代焼の大皿のご注文を受けており、十五年後のお成りとなったわけで、そのご予定が組まれてからは三ヶ月にわたり大掃除が敷地内、整備行い。展示室であった家には、お成り道の動線に従って赤絨毯を引いたり大変でした。と感想を述べられた。

井上泰秋氏は最後に、小代焼は”謎だらけ“として結ばれた。

（注1）現在の小岱山は、古くは小代山と書いていた。昭和三十年県立公園指定された時に小岱山となった。

（注2）ふもと窯では、藁灰釉をつくるために米藁を４００束（直径20ｃｍたばね一束）を焼いて唐臼で打って細くして釉薬甕入れて水を入れて混ぜる。

（注3）熊本大学松本雅明氏によって調査された。瓶窯の床面に試掘穴を入れて確認されている。「九州中南部の陶器」『九州の絵画と陶芸』１９７５年 平凡社

※録音テープをもとにおこしたもので、基本的には文意の入替があるが話されたことをまとめてみた。文責は副島にある。

お宝紹介！ 木工芸

木工芸 河匠　　河野 行宏

木工芸 河匠は、河野行宏氏が１９８０年、父親の工房で学び始められ、今年で40年になります。独自の研究によって造られた様々な作品が、店内に並んでいます。

河野氏のプロフィールには、「私は、幼い頃より木で色々なものを作っている父の姿を見て育った事から、木と親しむ機会が多く木工に興味を持つ様になりました。木は、人間よりもはるかに永い年月を、風雪に耐え生き抜き美しい木肌と杢理を造ります。この貴重な自然の恵みを日常の道具として、永く愛用して頂ける作品にと、私なりに努力して参りました。代々受け継がれる作品を作る事が私の願いであります。これからも、木の生きてきた年月に恥じない仕事をしていきたいと思っております。」と書かれています。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜

先日、河野氏を訪ねましたので少し紹介させていただきます。

まず最初に、木工芸は、でき上がるまでに非常に時間がかかることに驚きました！特に黒柿材等はまず切ってきた生木を最低一年間は水に浸すそうです。浸すことで木の栄養分や雑菌などを出します。そして今度は乾燥させます。十分に乾燥できて、ようやく作品造りに入れます。

それから、丸太から作品を削り出すために、まずはどんな作品を造るかをイメージして、どの部分をどのように使うか考えなければならないそうです。木は切った場所によって、ほんの数センチ違うだけで模様が変化しているから、思った通りのイメージにすることが難しいそうです。生木を切り分けるときも、イメージがないとできないのです。

※製造方法は様々で、前述の方法もその一つです。

河野氏は話しの中で、木工芸や漆塗りで有名な産地とは異なっているために独自の技術や考え方があるとおっしゃっていました。

その他、木にまつわる話や漆の話等々教えていただき、とても為になりました。

紙面の関係で割愛させていただきますが、最近、貴重な木を手に入れられたとのことで、それで何を造るか考え中とワクワクされている様子でした。

河野氏は、日本伝統工芸展等に27回入選される等、素晴らしい経歴をお持ちです。今回は紹介できませんでしたが、その素晴らしい作品は、是非、来店してお確かめいただければと思います。

最後に一言。河野氏は、本当に木が好きなんだなぁということが分かった訪問でした。

珍しい黒柿の生木

木工芸 河匠　　河野 行宏
〒八二二-〇〇〇三
直方市上頓野安入寺三四五八
電話 〇九四九-二六-四五三六

なんでも掲示板

●お茶会をお手伝いして

マイ茶碗を直方の子供達約６００人は持っています。小学校六年生の卒業記念として自分の手で造り上げた世界でたった一つの茶碗。

焼き上がり、次は茶会の体験をします。10年間の歩みを振り返ると、小さな積み重ねですが伝統文化の継承という一役を担ってきたと自負しております。

古高取焼を通して直方の歴史の一端を知りお茶会の中ではお互いに想いやり言葉を掛けて合いコミュニケーションを取る。伝統的礼

儀作法に触れることで日本文化を学んでほしいと願っています。

たくさんの方のボランティアに支えられながら”マイ茶碗“を子供達の手にとの想いでの十年。

私もこれから一年一年、健康な体を維持し参加できることに感謝したいと思っております。

子供達には一期一会の喜びと感謝する心根が育まれていくことを願っております。

田中紀子

●楽しかった焼物教室

「よろしくお願いしまーす」六年生の焼物教室の始まりです。

朝鮮出兵、朝鮮からの陶工、古高取内が磯窯出土品の紹介、陶片の説明に生徒たちは耳を傾けていました。

いよいよお待ちかねの茶碗づくりです。

粘土に恐々と手を触れる子供たちに、しっかりと、自分の手で粘土に触れること、粘土は生き物で、呼吸をしている、温度や湿度で変化する説明に戸惑った表情が押しつぶされたり、ひびだらけになったりの過程で何とかマイ茶碗の出来上がり・・・素焼き、釉薬掛け、本焼きのこれからの作業にまたまた楽しくびっくり顔「初めてだったけど、楽しかった」「出来上りが楽しみです」「ありがとうございました」「お茶会が楽しみです」の感想に、わたし達も笑顔で「ありがとう」市内11校、生徒数５４０名無事終了しました。

柴田ムツ子

一言

今年は年女
寄り道もよし、近道もよし
楽しく過ごそう

●オリンピックに思う

令和になって初の新年を迎えました。今年はオリンピックに明けオリンピックに暮れる一年になりそうです。残念ながら聖火は直方市を通りませんが、高取焼発祥の地として、オリンピックにちなみ何か記念になる事のお手伝いが出来ることを願います。

向野志津絵

●高取焼に関わって

古高取を伝える会に携わるようになって十年が過ぎました。

高取焼については、お茶会で見る道具類とか遠州七窯の一ヶ所程度の知識しかありませんでしたが高取焼に関わることで学習の機会も多くなり高取焼を広く知ることが出来ました。

今年も直方市内11校六年生によるマイ茶碗でのお茶会が会員の皆さんのご協力で一月～三月に行われます。

この様に多くの人と交わり魅力的になればこの会が皆さんに関心を持ってもらえると信じて頑張りたいと思います。

吉田佳代子

●田丸雄二氏を悼む

昨秋、現代の名工として厚生労働大臣より「卓越技能賞」の表彰を受けられた田丸雄二氏が歳末の12月26日に往生された。私もその葬儀に参列致しました。

氏は、造園を通して「日本の美」を探求してこられました。利休は全てのものを茶にし、芭蕉は句にしました。田丸氏も生活の中の美ではなく、美の中の生活を求めてこられたようです。

ある人が「自分とは、自然の中の一分である」と。現代文明における人間中心主義の考えは、人間と自然とを対立させ、そして人間は自然を征服できると過信するようになってきました。日本の美が少しづつ薄れてきたようです。

万福寺の住職から賜った法名は「語石院釈雄二居士」でした。行年75歳でありました。

鷹取宗恵

田丸氏は「高取焼を顕彰する会」の会長を務め、当会にも深く関わっていただきました。

●金剛山もととり保全協議会
（里山あじさい園だより）
〈場所：金剛山もととり広場〉

平成22年発足当初より、古高取を伝える会は団体会員として関わっていただいています。

本年の開園は六月初旬より三週間を予定しています。ご協力をよろしくお願い致します。

この「あじさい園」は、直方市の土地を借りて里山協議会が維持管理をしています。

あじさいは、15年位前から会員の一人がコツコツと挿し木をして増やしていったものです。３５００株になっています。

入り口にある「あじさい園」をはじめ手を入れた里山を管理していかなければ自然はすぐ元に戻ります。

予算等のことで問題山積みですが、直方河川敷のチューリップと山の「あじさい園」は、花の町直方で市内外に認知され多勢の人が訪れます。

行政の力を借りながら、よりよい方向にむかっていけるよう念じています。

末松登志子

●高取焼フランスへ

福岡市の高取焼味楽窯十五代の長男、亀井久彰さん(28)が、十二月五日(木)から、フランス各地を訪ね、高取焼と茶の湯の文化を紹介したと西日本新聞に掲載されました。久彰さんは、民間団体「日仏茶道交流会」のメンバーとして茶会や講演を行われました。また、十四日(土)には、十五代も合流されてボルドーワインの生産地として知られるサンテミリオンの古城で、現地の文化人を招き茶会を催されたそうです。

石光秀行

●『林芙美子顕彰』小中学生作文コンクール

令和元年十一月、直方文化連盟主催『林芙美子顕彰』小中学生作文コンクールにおいて、直方第二中学校一年生、山下愛加さんの高取焼を題材にした「私の好きな直方”伝統文化“」が、直方文化連盟会長賞に選ばれました。

小学生の時に体験した焼物教室やお茶会のことが書かれていて、当会の活動が子供たちの心の中で育っているかと嬉しく思いました。

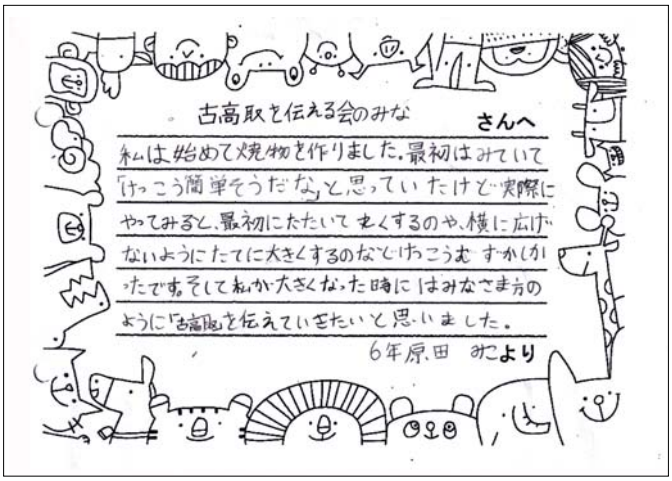
これから大人になっても直方や高取焼のことを大切に思ってくれることを願っています。

この活動も継続して行ければと思います。

永富セツ子

※紙面の関係で、作文の内容は掲載することができませんでした。申し訳ございません。

直方南小学校と福地小学校の六年生から、子供焼物教室の感想文をいただきましたので、次頁以降に少しづつ紹介させていただきます。

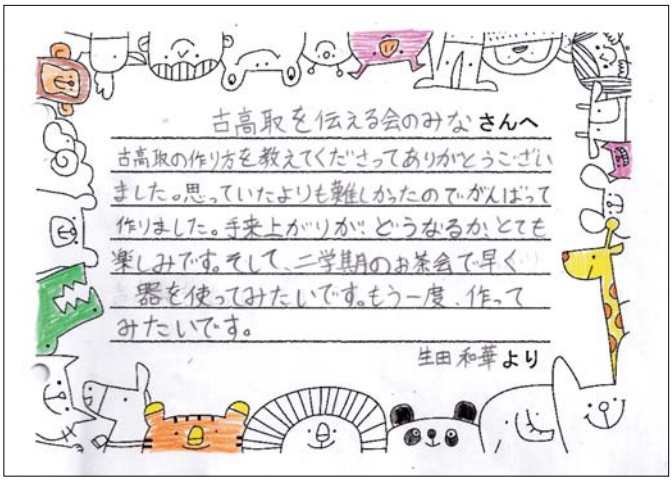


古高取を伝える会のみな　さんへ

私は始めて焼物を作りました。最初はみていて「けっこう簡単そうだな」と思っていたけど実際にやってみると、最初にたたいて丸くするのや、横に広げないようにたてに大きくするのなどけっこうむずかしかったです。そして私が大きくなった時にはみなさま方のように「古高取」を伝えていきたいと思いました。

6年原田　みこより

直方南小学校　原田 みこ

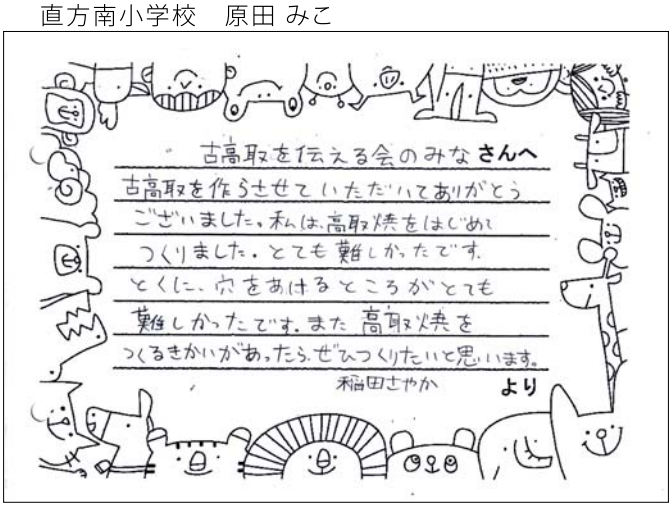


古高取を伝える会のみなさんへ

古高取の作り方を教えてくださってありがとうございました。思っていたよりも難しかったのでがんばって作りました。手来上がりが、どうなるかとても楽しみです。そして、二学期のお茶会で早く器を使ってみたいです。もう一度、作ってみたいです。

生田和華より

直方南小学校　生田 和華

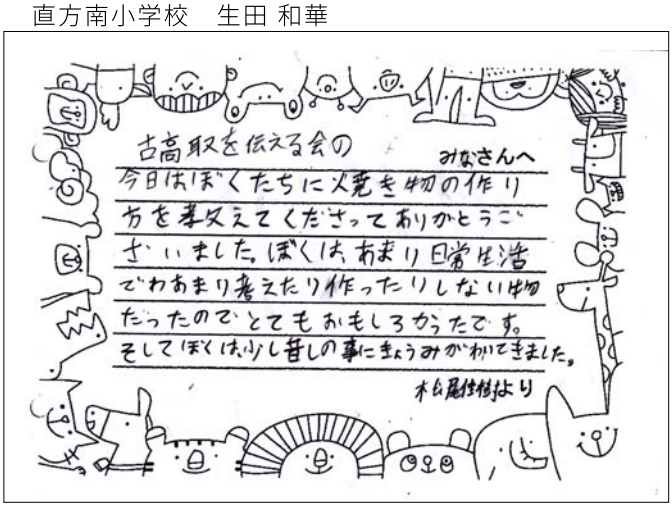


古高取を伝える会のみなさんへ

古高取を作らせていただいてありがとうございました。私は、高取焼をはじめてつくりました。とても難しかったです。とくに、穴をあけるところがとても難しかったです。また高取焼をつくるきかいがあったらぜひつくりたいと思います。

稲田さやかより

直方南小学校　稲田 さやか



古高取を伝える会の　みなさんへ

今日はぼくたちに焼き物の作り方を教えてくださってありがとうございました。ぼくは、あまり日常生活でわあまり考えたり作ったりしない物だったのでとてもおもしろかったです。そしてぼくは少し昔の事にきょうみがわいてきました。

松尾佳樹より

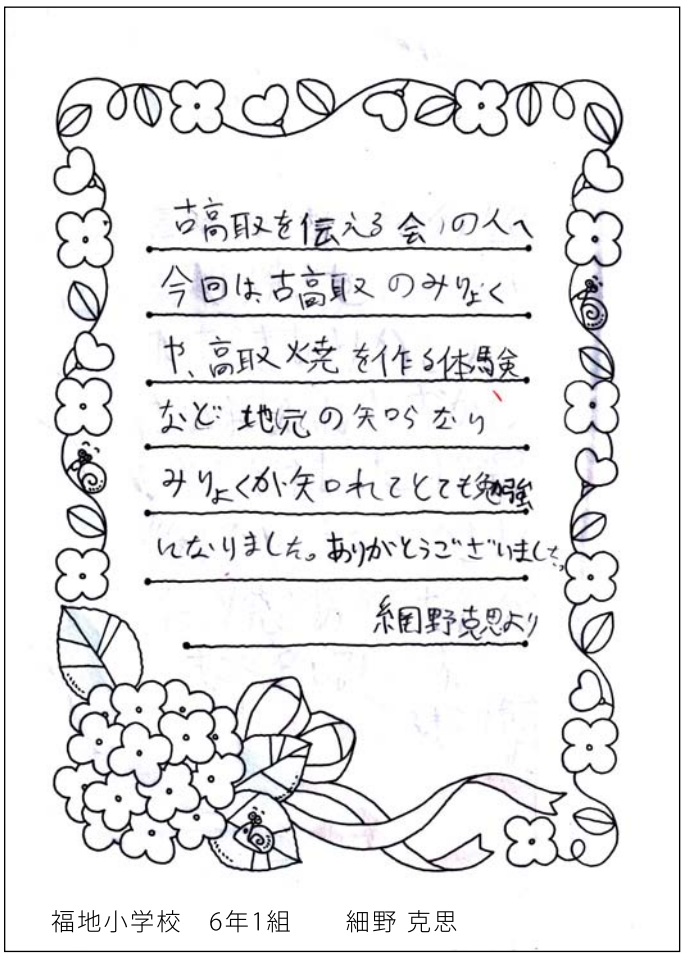
直方南小学校　松尾 佳樹

古高取伝える会のみなさんへ

今回高取の歴史と作り方を教えてくださりありがとうございます。僕はたかとりダムの底にかまがうめられていることは初めて知ったし、作るのは意外と難しかったので経験できてよかったです

小浦旭登

福地小学校　6年1組　　小浦 旭登



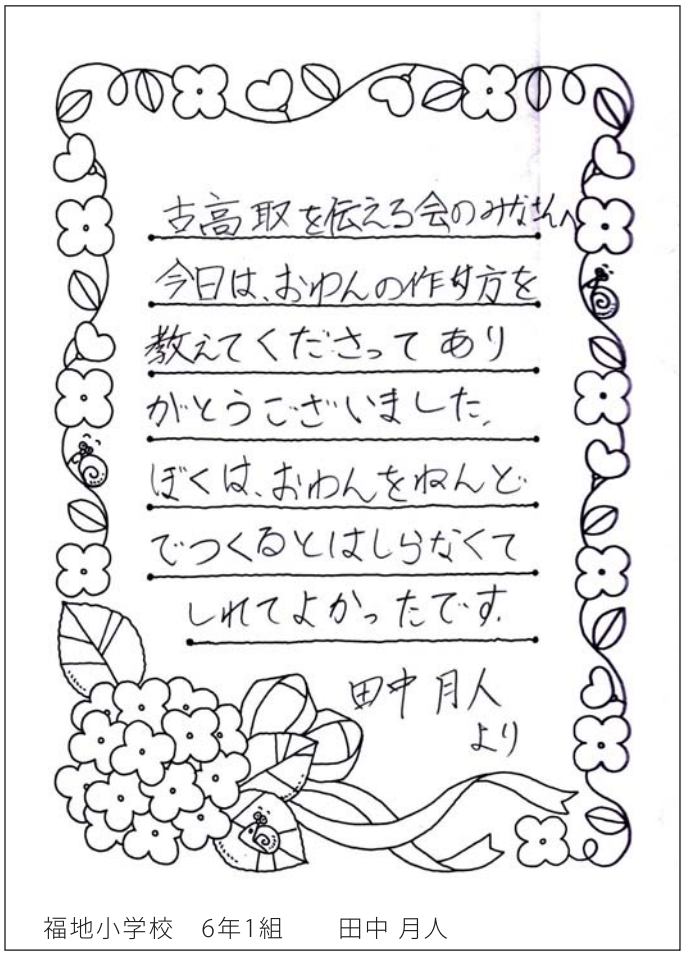
古高取を伝える会の人へ

今回は古高取のみりょくや、高取焼を作る体験など地元の知らなかりみりょくが知れてとても勉強になりました。ありがとうございました。

細野克思より

福地小学校　6年1組　　細野 克思

福地小学校　6年1組　　四宮 由梨



福地小学校　6年1組　　田中 月人

正誤表

古高取通信30号に構成ミスがありましたので、訂正させて頂きます。

3ページ
二段目一行　開窯 → 閉窯
三段目五行　口縁 → 口縁
三段目八行　円波四方水指 → 丹波四方水指
三段目十六行　口縁 → 口縁
四段目一行　口縁 → 口縁
四段目三行　高台に → 高台が
四段目五行　はぜたよう → はげたよう
四段目十六行　茶になった → 茶会になった

6ページ
二段目　十一月十九日 → 十一月三十日

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。
事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

令和最初の正月を迎えて、早一ヶ月。毎年、年月の過ぎるのが早くなるように感じます。不思議ですね。今年もあっと言う間に年月が過ぎてしまうのかも知れませんが、様々なことにチャレンジして、少しでも地域に貢献できたと思えるよう努力したいと思います。

最近、私のまわりではインフルエンザ等が流行っています。元気でなければボランティア活動等もできませんので、健康にも注意して頑張りたいと思います。

「古高取通信」会報・NO31

〈発行〉
古高取を伝える会

〈発行日〉
令和二年一月三十一日

〈現在の会員数〉
正会員　五十四名（五十四日）
賛助会員　十八名（二十七日）
団体　一団体（一日）

〈マイ茶碗の数〉
七千九百八十三　個

〈事務局〉
〒八二二-〇〇二六
福岡県直方市津田町七-十四
TEL〇九四九(二三)一三一一